

木で作る 医療機器おもちゃ



堀内さん（左から2人目）と医療用玩具で遊ぶジュニア記者たち。だんだん笑顔が広がっていった（神奈川県大井町で）

病院で待つ間、「何をされるんだろう」と不安を感じたことはありませんか？ 治療の内容が事前にわかっていたら、恐怖心は和らぎます。子どもの患者に検査や手術の説明をする時に使う医療機器などのおもちゃ「ふればらウッド」を作っている木工職人・堀内良一さん(48)に、作り始めたきっかけなどを聞きました。

(小5・田村輝、中2・工藤菜緒子、高1・高原玲央、高2・中村晴香記者)

木工職人

堀内さんに聞く

小田原漆器の木地を作っていた堀内さんは、約8年前に知人の神奈川県職員から、小児病棟などで使う医療用玩具作りを頼まれました。「知人は木工が趣味

で、県立病院の要望で試作したら、『子どもがあまり怖がらなくなった』と言われたそうです。本格的に生産するために、色々な木のおもちゃを手がけていた私

に声がかかったのです」神奈川県大井町にある工房「堀内ウッドクラフト」を訪れると、木材や木工器具と一緒に、医療用玩具が並んでいました。木箱のカバンには、聴診器や注射器などが入っています。別の箱を開けると、手術室と病室に早変わり。車いすやストレッチャーは車輪が動き、放射線治療器は照射部が回転、MRI（磁気共鳴画像装置）は患者が寝る検査台が前後に動きます。

聴診器、注射器

子供の不安解消

「若い患者に治療の説明をする際、まず座って話を聞いてもらうことが大変。医療用玩具と一緒に遊べば、これから行う治療内容を自然に伝えられます。子どもが納得し、治療を嫌がらなければ、医師や看護師の負担も減ります」

欧米では絵や写真を見せて説明することもありますが、立体的なおもちゃの方が理解されやすいといえます。木にはプラスチックや金属とは違う温かみがあり、医療機器の形をしていてもリアル過ぎないの、それほど恐怖感を与えずにすむのも特長です。

堀内さんによると、小児医療用の木製玩具を製造しているのは国内でこの工房だけ。神奈川県産の木を

使い、堀内さんがほぼ一人で作ります。これまでに、病院の小児病棟や大学の看護学科など約100か所に納めました。小学校へ通う前後の患者への説明だけでなく、看護学生の教材としても使われているそうです。

値段は数千円から10万円を超すまで様々です。注文を受けてから生産し、依頼があれば新たな医療機器のおもちゃ作りにも挑戦します。「病院や医療機器メーカーで実物を見せてもらい、医師や看護師らと相談しながら開発を進めます」。単なる模型ではないので、繰り返し遊んでも壊れないように工夫するのが一苦労だそうです。

5月下旬には、米シカゴで開かれた小児医療に関する学会の会場で、医療用木製玩具を展示してきました。「アメリカでは子ども患者への事前説明が広く行われていましたが、日本では医療制度が異なることもあり、なかなか余裕がないようです。子どもが安心して治療に臨めるよう、これからも色々なおもちゃを手がけたいと思います」

ジュニア記者の一人も、幼い頃に頭を強く打ってCT（コンピューター断層撮影法）検査を受け、不安を感じた経験があります。子どもも検査や治療を納得して受けられるようになればいいと感じました。